

第IV部門

防災ワークショップの評価および検証に関する研究

京都大学工学部	学生員	○吉岡 七輝
京都大学大学院工学研究科	学生員	松田 曜子
京都大学防災研究所	正会員	竹内 裕希子
京都大学防災研究所	正会員	岡田 憲夫

1. はじめに

災害に対し、平常時から備えをすることの重要性が強く認識されるようになってきており、NPOや行政などによってさまざまな事前対応策が試みられている。その中の一つに防災ワークショップがある。現在、個々の防災ワークショップは実施主体・内容ともに多岐にわたるが、まだ新しい取り組みということもあり、それぞれの防災ワークショップが発揮した災害軽減効果の評価は十分になされているとはいえない。そこで本研究では、参加者のワークショップ参加動機と満足度、および主催者の開催意図に着目し、アンケート調査および観察によって防災ワークショップの災害軽減効果を評価し、さらにその効果を高めるための提言を行うことを目的とする。

2. 対象とする防災ワークショップの概要

災害発生後の人々の行動パターンとして、①各自の対策に集中する人、②地域のリーダーとして外部からのボランティアを受け入れ、地域のニーズに合わせてコーディネートする人、③災害ボランティアとして活動を行う人、④ボランティアのコーディネーターとして被災地に入る人の4パターンに分類できると仮定する(図1)。その中でも、被災地においては、②のタイプの人の存在が災害直後や復旧時に大きな役割を果たしていることが、新潟県中越地震後における中越

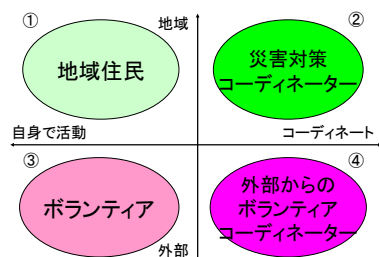


図1 被災地で活動する人の分類

市民復興会議の活動事例¹⁾などからわかる。そのため、地域で活動できるコーディネーターの育成を目的としたワークショップを評価し改良していくことが、地域で災害に備える力のさらなる向上につながると考えられる。そこで本研究では、災害時に被災地でボランティアの受け入れや諸機関との連絡・連

表1 千葉県災害対策コーディネーター養成講座概要

(主催者) 千葉県
(運営者) NPO法人レスキューストックヤード
(開催日程) 第1回(松戸会場) 2006年10月20日、21日、22日 9:00~16:00
第2回(千葉会場) 2006年10月27日、28日、29日 9:00~16:00
(内容) 講義・・・80分×5 G.W・・・約3時間×4

1日目	講義①	災害ボランティアセンターとコーディネーターの役割
	講義②	新潟県中越地震から学ぶ人間力と地域力
	GW①	災害ボランティアセンター受付模擬演習
2日目	講義③	阪神大震災の災害現場から
	GW②+講義④	まち歩き
	GW③	図上訓練
3日目	講義⑤	災害時要援護者の課題と対応について
	講義⑥	地域の防災力を高めよう
	GW④	地域の課題を考えよう

携などを行うことができるコーディネーターの養成を目的とした防災ワークショップ「千葉県災害対策コーディネーター養成講座」を対象とした。同講座は千葉県が主催し、NPO法人が運営を委託される形で行われた(表1)。また、メニューは図2に示す特徴をもっていた。参加費は無料で、応募制であった。なおこの講座は、修了者の人数に基づく評価基準が千葉県に

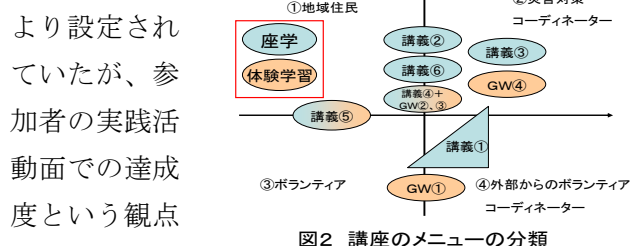


図2 講座のメニューの分類

より設定されていたが、参加者の実践活動面での達成度という観点からの評価基準は示されていなかった。

3. アンケート調査結果・分析

講座の参加者の動機や満足度、主催者の意図との合致の程度を測る目的で、参加者および主催者に対してアンケート調査を行った(図3)。調査は、筆者が第

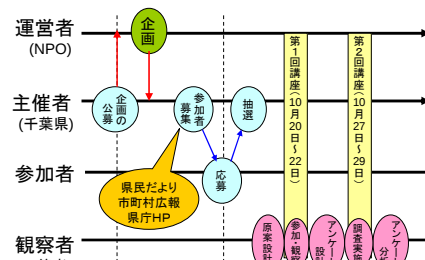


図3 対象とする講座の開催までの流れ

1 回の講座に参加し、講座のメニュー内容や参加者の反応などを実際に見たのちに設計し、第2回の講座において実施した。参加者に対するアンケートは、回答者属性に関する7項目、災害に対する意識に関する2項目、現在講じている対策に関する1項目、今回の防災ワークショップに関する8項目の18項目で構成した。配布数は50、有効回答数は46であり、回収率は92%であった。回答者の性別は、男性が35名、女性が11名であった。年齢は、20代が1名、30代が4名、40代が6名、50代が11名、60代が19名、70代以上が5名であった。今までに防災に関する講習会やセミナーに参加した経験があると回答した参加者は19名、ないと回答した参加者は27名であった。被災経験があると回答した参加者は10名、ないと回答した参加者は36名であった。参加者に講座の各メニューに対する評価を5点満点で回答を求めたところ、各科目の評価の平均点は4.05点であった。

主催者対象のアンケート結果からは、主催者の千葉県よりも実際に企画に携わったNPOの方が、講座に対して高い期待をもっていたことがわかった。

参加者を対象として行ったアンケートの回答において、回答者属性および回答者の意識に関する項目と講座に関する項目の間でPearsonの χ^2 検定を探索的に行った。検定の結果、評価点と、回答者属性との関連は認められなかった。また今後どのようなことができるようになりたいかという項目と、回答者属性との関連は認められなかった。なおここでは、各メニューの合計点について平均以上の点をつけた回答者を「評価点高グループ」、平均未満の点をつけた回答者を「評価点低グループ」としてカテゴリ化し、 χ^2 検定の対象とした。

講座参加の動機として、主催者が想定していた「地域でリーダーとしての活動をしたい」と回答した7名と、その他の動機を回答した39名の間で、講座の評価点のt検定を行ったが、差はみられなかった($t(44)=0.51, ns$)。これは、講座の内容のバランスがとれていることを示すといえる反面、参加者が想定した内容と実際の内容のギャップがあった可能性をも示すと考えられる。また、講座に期待した事項と講座で得られた事項が一致した回答者群の評価点

が一致しなかった回答者群に比べて有意に高い傾向を示した($t(23.7)=2.07, P<.05$)。これによって、講座に求める目的が企画の意図と合致する参加者が集めることができれば、講座に対する満足度は高まる傾向にあることが確認された。また、参加者対象アンケートの「今後どのようなことができるようになりたいか」という問いに対し5点満点で回答を求め、それぞれの回答相互間でPearsonの相関係数を求めた(表2)。その結果、知識をさらに収集したい意欲の強い人が、知識の使い方を周りの人に教えたり、知識やノウハウを共有する場を作ったりする意欲が強いとは限らないことがわかった。

また、講座においてグループワークは4回行われたが、そのうち千葉県の弱点と対策をグループで考えるという内容のグループワークに対して、参加者は有意に高い評価点を与えた($t(36)=3.421, P<.01$)。また、自由回答でも「千葉県の地域特性を考慮したメニューを希望する」という意見が複数見られた。

表2 今後できるようになりたいことの各項目間の相関

	1	2	3	4	平均	標準偏差
1 さらに基礎知識を収集したい	-	.342*	.262	.075	4.51	0.69
2 得た知識を実際に使えるようになりたい		-	.475**	.380**	4.47	0.69
3 知識の使い方を周りの人に教えられようになりたい			-	.443**	4.11	0.80
4 地域で知識・ノウハウを共有できる場を作りたい				-	4.27	0.81

4. 提言

今回実施された枠組みに対し、以下のことが提言できると考える。まず募集時に、災害対策コーディネーターとは、平常時にどのような取り組みを行う必要があるのか、また災害時に具体的には何を行うのか、一般にどのような資質が求められるのかを具体的に参加者に示すことが必要である。また、プログラムに、具体的にどのような活動を行えばよいか、といったことを考えるためのメニューや、千葉県の地域特性を考慮したメニューを追加することも検討する価値があると考えられる。

5. おわりに

本研究では、地域で活動する災害対策コーディネーターの育成を目的とした防災ワークショップの枠組みに関して提言を行った。ワークショップが現在の運営者の手を離れた後も地域で継続できる仕組みづくりを構築することを、今後の課題とする。

参考文献

1)中越復興市民会議HP：<http://www.cf-network.jp/>